

「近藤文庫」について：九州大学所蔵儒学者関係諸文庫と崎門写本

柴田，篤
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門：教授：中国哲学史

<https://hdl.handle.net/2324/13293>

出版情報：貴重文物講習会．17，2009-02-13．九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：



2009年2月13日(金)

九州大学附属図書館 貴重文物講習会(平成20年度 第11回)資料

「近藤文庫」について —九州大学所蔵儒学者関係諸文庫と崎門写本—

文学部 柴 田 篤

一、近世儒学関係書籍と九州大学附属図書館

1、九州大学儒学関係特殊文庫

- (1)「碩水文庫」(中央館保存書庫)1933、『碩水文庫目録』(1934)
- (2)「近藤文庫」(中央館保存書庫、混排)1934
- (3)「武内文庫」(文学部書庫、混排)1955、文学部図書室分類カード「武内文庫」
- (4)「坐春風文庫」(文学部書庫)1960、『坐春風文庫 目録 及び注』(1969)
- (5)「益田(古峯)文庫」(教養部分館、混排)1966、『益田文庫分類目録』(手書)
- (6)「崎門文庫」(文学部書庫)1981、『崎門文庫目録』(手書、1985)
- (7)「高瀬文庫」(文学部書庫、現中央館)1983、『高瀬文庫目録』(手書、1985)
- (8)「吉村文庫」(文学部貴重書庫)1985、『吉村家文庫目録』(1986)

2、楠本正継教授(1896～1963)

- 明治29年12月(1896) 長崎県東彼杵郡崎針尾村(現佐世保市)に出生(29日)
- 大正4年3月(1915) 長崎県立平戸中学猶興館卒業
- 8年7月(1919) 第五高等学校卒業
- 11年3月(1922) 東京帝国大学文学部支那哲学科卒業
- 12年4月(1923) 浦和高等学校教授
- 15年10月(1926) 九州帝国大学法文学部助教授
- 昭和2年5月(1927) 九州帝国大学法文学部支那哲学史講座教授
- 3年3月(1928) 哲学及び支那哲学史研究のため独・英・中に留学(満2年間)
- 9年4月(1934) 文科研究室主任(2年間)
- 17年6月(1942) 文学博士(東京大学)の学位を授与
- 19年5月(1944) 九州帝国大学附属図書館長(第11代、2年間)
- 24年4月(1949) 九州大学評議員(2年間)
- 28年4月(1953) 九州大学文学部教授、大学院文学研究科指導教官
- 29年4月(1954) 文部省科学研究費による総合研究「九州儒学思想の研究」開始
- 31年10月(1956) ロックフェラー財団研究助成費による「宋明思想の研究」開始
- 35年3月(1960) 九州大学定年退官
- 35年6月(1960) 九州大学名誉教授
- 37年11月(1962) 『宋明時代儒学思想の研究』を廣池学園出版部より出版
- 38年11月(1963) 『宋明時代儒学思想の研究』により西日本文化賞受賞
- 38年12月(1963) 福岡市の自宅において逝去(23日)享年66
- 39年1月(1964) 『宋明時代儒学思想の研究』により朝日文化賞受賞

3, 楠本家三代と旧蔵書

楠本端山 (1828 ~ 1883) 名は後覚、「楠本文庫」(長崎図書館)

楠本碩水 (1832 ~ 1916) 名は孚嘉、「碩水文庫」(九州大学)

楠本海山 (1873 ~ 1921) 名は正翼、端山の長子、「楠本文庫」(長崎図書館)

楠本正継 (1896 ~ 1963) 号は剛堂、海山の長子、「楠本文庫」(國士館大學)

(1) 「碩水文庫」(九州大学附属図書館中央図書館) 1933 年(昭和 8) 購入

『碩水文庫目録』(1934)

(2) 「楠本文庫」(長崎県立長崎図書館) 1975 年(昭和 39) 購入

『長崎県立長崎図書館古典籍目録』(2008)

(3) 「楠本文庫」(國士館大學附属図書館) 1965 年(昭和 40) 寄贈

『楠本文庫漢籍目録』(1973)

二. 崎門写本について

1, 山崎闇斎と崎門三傑

山崎闇斎 (1618 ~ 1682)

佐藤直方 (1650 ~ 1719)、浅見綱斎 (1652 ~ 1711)、三宅尚斎 (1662 ~ 1741)

2, 崎門文献

(1) 『日本道学淵源録』大塚観瀾編、楠本碩水増補、1900 序、1934 刊

(2) 『崎門学脈系譜』楠本碩水編、1891 序、1940 刊

(3) 『大倉精神文化研究所蔵 崎門学派著作文献解題』(『阿部隆一遺稿集』第三卷)

3, 「近藤文庫」収蔵写本

① 『易学啓蒙先天図説』1 冊(月田蒙斎撰)(123/エ/21)

② 『海気深处詩藁』1 冊(月田蒙斎撰)(564/カ/21)

③ 『延平答問』2 冊(朱熹編、正保 3 年刊、「敬甫」印、中村之欽旧蔵)(123/エ/23)

④ 『論愛之理之説』(高階有則撰)(123/ロ/39)

『論宇井弘篤愛之理説』(碩水文庫/ロ/16、貴重書庫)

【楠門学参考文献】

(1) 柴田篤「貞方弥三郎と柳浦文集」(『中国哲学論集』第 11 号、1985)

(2) 柴田篤「『鳶魚斎詩文』—明治の儒学者楠本海山の詩稿と文稿—」

(『九州中国学会報』33 号、1995)

(3) 柴田篤「楠本海山覚書—ある崎門学者の生涯と著述—」(『香椎潟』49 号、2003)

(4) 柴田篤「文学部所蔵「武内文庫」の謎を追って—楠本正継図書館長とその時代—」

(『図書館情報』210 号、2005)

(5) 柴田篤「楠本家三代の家学と退溪学」(『中国哲学論集』第 31・32 合併号、2006)

(6) 柴田篤「碩水文庫余滴—楠本正継教授と九州大学附属図書館—」

(『中国哲学論集』第 33 号、2007)

(7) 柴田篤「楠本正継博士覚書」(『名古屋大学中国哲学論集』第 6 号、2007)

(8) 柴田篤「益田古峯小伝—九州大学「益田文庫」の旧蔵者—」

(『中国哲学論集』第 34 号、2008)

大倉精神文化
研究所蔵 崎門学派著作文献解題

は し が き

崎門学派に関する研究は從來必ずしも乏しいとは言へぬ。併しその大部分は極めて限られた資料に頼つてゐる。従つて同学派の全貌を根本から尽し得ぬことは言ふまでもない。それには理由があつた。崎門学派は師弟の間の講義口授を重んじ、その講述の筆録を極めて丹念に行ふ伝統があつた。梓に上するのは大ていはその講義の際のテキストとして使用する教科書であつて、その詳細な考説は講述の間に下された。宋学の風にならつて「朱子語類」の様な語類に、重きを置き、所謂ソ式の独得なスタイルを伝襲してゐる。かうした類のうち、重要なものでも版になつたものは稀れで、大部分は写本で通行してゐる。口述を弟子が筆録したものを師が校閲して加筆訂正した言はば証本と言ふべきものがある。従つてこの学派の研究は、刊本にのみ頼るとするならば、極めて不十分であることは自明である。

明治後新に活字に翻印されたものは江戸期の板本の極く一部である。写本のうち翻刻されたものに至つては更に寥寥たるものである。有名な浅見綱斎を例にとつて見ても、未だに全集は刊行されてゐない。明治後の翻刻も「靖献遺言」の様なある一部のものは度々版種を重ねたが、他は顧みられない。綱斎の生々とした真面目を發揮してゐる重要な講義筆記や論説は依然として未刊のまゝである。同著作のうち、いかに板本、活版本が少いかは後に記すこの目録を見ただけでも容易にわかり、且つ一驚するであらう。

深くこの方面の研究調査にふみ入らうとする者が、先づ当惑するのは文献である。写本であるから、今となつては何処にでもあるといふわけにいかない。即座に手に入らぬ。また何処かで幸に入手したとしても、写本であるから魯魚の誤りは免れない。一本でよしとして安んずるわけにゆかぬ。幾本かを比較校合せねば十分ではない。先づその本が何処に蔵されてゐるか、その所在を探さねばならぬ。次にその本の系統と性格の書誌学上の検討を下さねばならぬ。残念ながら現在の学界の情況はかゝる段階にある。

まだこの確実な基礎調査が成就してゐないのである。これは敢て崎門学派の場合に限らぬ。五十歩百歩の差違はあつても、日本思想史の分野ではまだコンパスなしに航海する様な段階であると称しても、強ち極論ではない。高遠な研究調査どころか、その前にその地盤の地ならし工作が成つてゐないのである。しっかりした地盤の上に立たぬ建築では砂上の楼閣になる。これで痛痒を感じないのは、手近な不完全な狭い資料で空論してゐる様なものである。餘程不勉強な安易な所に安んじてゐるのである。日本の学問は底が浅いと言はれても、この点では返す言葉がなからう。

崎門学派の研究も、他に比して、この学派の性格上、今最初にせねばならぬのは、現存文献の書誌学上の調査、書目の作成である。各地各文庫の架蔵本の所在とその書誌が明かになり、次いでそれ等を相互に比較校合すれば、始めてよいテキストが作成できる。従来は折角犠牲を払つて刊行されても、校合が不十分のために学術上使用に耐えないものがあつた。これ程の浪費はない。現今の出版界ではかうした過去の先哲著作の翻印が極めて成就し難い情勢にある。従つて当分刊行は理想であつて、仮令その目標に達せずとも、書目が完備してをれば、一応研究者の要望に應ずることとはできる。緊急になさねばならぬことは書目の編纂である。此は一人ではできぬ。広く全国の同学者の協力共同作業を俟たなくては不可能である。この縁の下の方持、地味な作業をもつて研究者は相互に公平な地盤から出発できる。

誠下第二 此章論聖人全此實理而五常百行本乎此矣而及字昔思誠之功
 朱子曰上章言大極陰陽五行下章言

誠下第二 此章論聖人全此實理而五常百行本乎此矣而及字昔思誠之功
 朱子曰上章言大極陰陽五行下章言太極
 之在人者也又曰上章言聖人之誠即天道
 之誠下章言思誠者人之道也 性理大全

收按今注藏字思
 誠字誤

誠下第二 此章論聖人全此實理而五常百行本乎此矣而及字昔思誠之功
 朱子曰上章言太極陰陽五行下章言太極

其五以下、以止為五行之用、太極及不與、故至之疑、如此則常太極在天上、不似曰元亨誠之通、利貞誠之復、朱子以為然、改之新注、已曰以神妙萬物之體而言、至四時運行、萬物終始、則引無極二五妙合之語、又曰以神妙萬物之用而言、充足以見太極體立用行、意通、非太極之故矣、太極不在一隅之意、意明白、

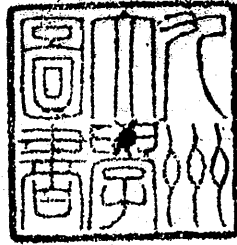
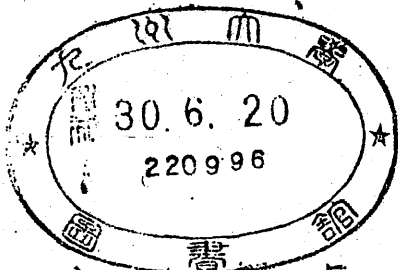
動一靜之間、體立用行、莫非太極全體之故矣、如苗說所言、則似太極在一隅也、此所以下至之疑問、而朱子改之矣、
辛亥八月十六日識、
新苗二說異同、辛亥八月十六日所識、恐為得之、但其說有未顧者耳、今按朱子苗說、亦豈有大差謬者哉、說去說來、無太極在一隅之弊也、然已曰自五而一、以推到一太極、又曰自五而萬、則其以不推之曰自一而萬、

與物對以說神、
樂止第十七、
八音以宣八方之風、見同語、按國語、開樂記曰、八風從律而不益、注、八風從律、應節至也、說八風、八方之風也、律謂十二月之律也、樂音義、八風其樂得其巧、故八風十二月律應八節而至、不為益也、八風者、言虎通云、距冬至四十五日、條風至、條者生也、四十五日、清明風至、清明者芒也、宋史記律書云、律屬天、所以運五行、八正之、

太極只是動靜之理也、陽之時太極在陽而靜之理亦在于此、陰之時太極在陰而動之理亦在于此、是何故耶、理無方、體雖有動有靜、亦只是一理而已、陽之時則特陽之理為主、本是一理、故靜之理亦不離于此也、所謂理無大小、亦此義也、以此意推究之、則可領會動靜而與動靜之神矣、
張一故神之說、與此神同、惟彼就神明神此、

陰陽、太極者、主意有異、彼上文言生之、叙故說五行陰陽太極、只是一而不相離也、此則並指上指其本體而示之以小圖、闡言之、則猶自春夏推原之、至冬、是靜也、太極之體所立也、此時萬物統體一太極、所謂既也、此時運行萬物終始、猶言自冬推原之、至春夏、是動也、太極之用所行也、此時太極散殊萬物、所謂闢也、五而一、而一陰之圖也、靜也、太極之體立五而一、陽之圖也、動也、太極之用行、一動一靜、相推行而變化無窮、盡也、水云、陰火之陽、是物之不相通者、莫甚焉、而其相根者、乃是理、所謂神之妙也、下文承以水來、以五行說起、語類方子錄、分為兩截者、其分畫恐異於解意、
有享保、六年癸丑十二月十一日識、
太極只是動靜之理也、陽之時太極在陽而靜之理亦在于此、陰之時太極在陰而動之理亦在于此、是何故耶、理無方、體雖有動有靜、亦只是一理而已、陽之時則特陽之理為主、本是一理、故靜之理亦不離于此也、所謂理無大小、亦此義也、以此意推究之、則可領會動靜而與動靜之神矣、
張一故神之說、與此神同、惟彼就神明神此、

太極只是動靜之理也、陽之時太極在陽而靜之理亦在于此、陰之時太極在陰而動之理亦在于此、是何故耶、理無方、體雖有動有靜、亦只是一理而已、陽之時則特陽之理為主、本是一理、故靜之理亦不離于此也、所謂理無大小、亦此義也、以此意推究之、則可領會動靜而與動靜之神矣、
張一故神之說、與此神同、惟彼就神明神此、



論語卷之一

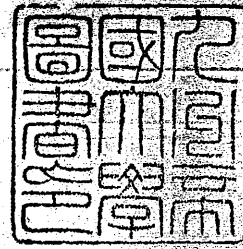
學而篇一

昔ハ書ヲ竹デアミテ相應ノカサホドニ卷テ持スヘ一巻トスハソレカラノ詞ナ
リソレ故ワケ様ニ旨有テワケセアリアニリニカサ高ナレバヨイホドライノレキル
所カラワケルヲモアル論語ハ始ヨリ終ツミイテラレニ其内カサ高ナユヘ卷ラ
ワケツメフソレデ卷ナガラノ名ヲヨバウトテ始ノ二字ヲ取テ付ルニデニテ
篇名ニ意ナシ其内ワケ様ニ旨ノアルヲモアリ又入マドツタル所モアル其
旨アル所ノ分ハ註ニモ念入テスハル、左様ナ念ノケイルハ其通ト合ス
ヘレ篇ハ古ノ竹デアミテナリツイテルヲ云此為書之首篇ハ第一番
ノサレロニナリ首ノ字ノ字法ハ初ノ字ト違テコレガ頭トスル一番カケ
ノ篇トスラモスル旨有テノ字使ナリ二十篇皆ラ口カハナケレニ此篇ハ
第一番故故ニ同ト聖言ト云テモ本ヲ務ノ意多イテ何事デモ天下ノ

武内継治

101920

昭和9.11.15



論語卷之一

學而第一

昔ハ書ヲ竹デアミテ相伝ナリヤサホトニ卷ヲ持テ一卷トハシ
 ヲフノ詞ナリソレニエニワケ様ニ旨アツテワケルモアリアリ
 ヤサ高ナレバヨクハドクイノシキル処カフワケル一モアル禰
 衡ハ始ダフヲバリツゞイテオレニ其中ヤサ高ナニ卷ヲ
 ワツタズソレデニキナガラ右ヲヨバウトテ始ノ二字ヲ
 取テ付ルニデニテ篇名ニ意ハナク其中ワケ様ニ旨ノア
 ル一モアリ又入ニシリタル処モアル其旨アル処ノ今ハ註モ
 念メテ多ハレを様ナ念ノナク処ハ其通リト合点スニ第
 ハ右ノ竹デアレダナリヲツクイデレ一ヲス此為ニ自然首
 篇カ一番ノサレロスナリ首字ノ法ハ初學ト違フ
 スレガ頭ト名一番カケノ篇ト多重ニズル旨アリテ今使
 ヒナリ二十篇皆ヲロカハナケレ此篇ハ亦一番故ニ同

九州大学所蔵特殊文庫関係学統図

